
未来へ向けた42年目宣言

大房さん 001

よろず屋コーナー

新たな初まりの始めに

鈴木所長 002

マエダ商会「生・意・気」とは…

マエダシゲル 005

タケヒロアワー

タケヒロ雄太 006

特集:第42回

ハイロシネマフェスト

上映作品全批評 009

震災との関わりを見せた中年映画たち

フェスト総括に変えて

大房さん 015

あの時をわすれない

ほしのあきら 016

フィルムが無くなるよきの

フィルムメイキング

映像解体技術

第1回 映像技術を教える

ほしのあきら 018

未来へ向けた 42年目宣言

上映集団ハイロ代表 大房さん

「結局自分のために作ればいいんだ！」

映像は現実を写す記録であるけれど、単なる記録じゃない。

撮影や編集の方法によって文体を持った表現になり

そしてさらに、文体を超えた個人の意識や心を表すアートになる。

映像があふれる今、そうしたひとりひとりの表現が映像の世界に

もつとたくさん生まれてくれば、世界は少しずつ回復していくだろう。

だから、こんなに大変なときには、

もう一度ゼロから映像の力を再確認して、そして映像を記録としてではなく、

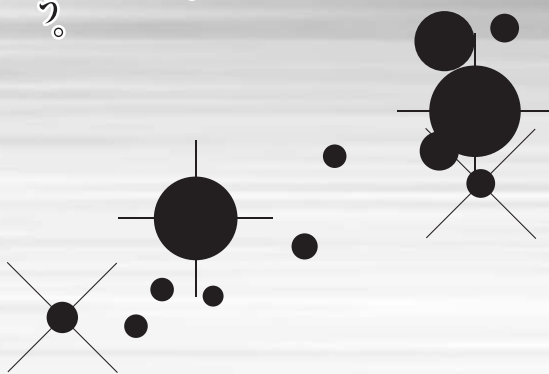
自分の心を映し出す表現として使ってみよう。

君が撮った映像には結局、君しか写っていないんじゃないか。

だったら、自分の思うとおり、自分のためにだけに作れば、それで十分じゃないか。

そして、自分のために映像を作る人が集まれば、きっと何かが動き出す

今年はそんな気持ちを持ってオールナイトをはじめます。



大房さん／OFUSA Junichi

本名大房潤一（おおふさじゅんいち）：映像ディレクター／VJ／大学講師

80年代にビデオアートのことをはじめて以来、映像業界に居る。

90年頃よりハイロ代表になり細々とフリースペースを運営していたが、いろいろなメンバーが増えて活動も活発になったので今は事務局長的役割。会計や連絡係、Web運営などをやっています。

よるず屋 コーナー

◎司会／進行 鈴木所長

◎ご意見番 大房さん



新たな初まりの始めに

鈴木所長

ハイロの反骨精神を象徴する、無差別・無審査の上映空間『フリースペース』は1980年から続いた屋号を『よるず屋コーナー』と名称を改めました。

誰のどんな作品でも上映し、上映後に作品について語り合う作家と観客の関係は、その場を共有した人にしか味わえないライブ感がある。

誰のどんな作品が上映されるか毎回違うと言うことは、何が起ることも何が始まることも不思議ではないと言うことである。

作家自身の修行の場なのかもしれないし、渾身の作品を発表する場になるかもしれない。なによりも大切なのは見せたいと思

う気持ちなのだ。

80年代のスタート当時は、8ミリ全盛期で作家と観客がケンケンガクガクのどつき合っていたようだが、現在は今だに8ミリが健在する希少価値の高い上映会としてアングラ感を継承している。鑑賞という体験と、会話という発見が現実目の前で行われ、臨場感が伝わってくる。『批評性を確保する』をテーマに30年以上も続けてきたのは伊達ではない。

他では見られない作品や、新人の登竜門として「シネマフェスト」と並ぶハイロの由緒あるコーナーとして続けていきたい。

鈴木所長／SUZUKI Syochyo

本名鈴木宏忠(すずきひろただ):1969年 東京都北区 出身／
アート・ディレクター／東京映像芸術学院・卒／98年から上映集団ハイロに参加
8ミリフィルムと出会い、気がつけば二十数年、何がどう変わったなんて一言では言い切れないけど、愛着も執着も肉体の一部と化している気がします。
最近、ビューワを目の前に食事をとる姿に、嫁に変わり者呼ばわりされる。まけないぞ〜。

午後11時 05分～

フィルム行脚-2012-

大西健児

Super8

17分



銀鉛画報会
FILM行脚

SCREENING
ASSOCIATIONS of SILVERPENCILS

さてさて、幸いまだ店頭に8mmフィルムも残っているようで、せっかくなので最後までカタカタ回し続けていきたいものです。

春先から、フィルムと映写機を担いで上映巡業していました。こんなにも映像制作がお手軽になり、発表するなり配信するなりも簡単になった時代に、相変わらずドタバタしてますが、カタカタやってる方がしっくりしますな。

大西健児／ONISHI Kenji

1973年三重県出身、シネマトレイン代表。この際、最後まで8ミリ映画に付合う所存。代表作に「焼星」「尺景」「銀鉛画報会」等。2012年は三軒茶屋KENにてフィルムワークショップ・銀鉛画報会を毎月開催してます。

<http://www.kenawazu.com>

フロム・いわきギャラリー&カフェブラウロート

梅宮雅夫

DVD

15分



2011年の7月頃、あの震災後、福島県いわき市にて昨今の風評被害にもめげず、ブラウロートというギャラリー&カフェを営んでるご夫婦とその仲間たちの声を撮って来ました。作品というよりもお便りに近いです。被災した、いわき小名浜の映像も交えました。

梅宮雅夫／UMEMIYA Masao

しがたないDVD作成家業やってます。作家でもアーティストでもありませんが、少しでもひと様に顔向け出来るようなものを作る努力をしております。

水晶といわしゃじん

YOO

DVD

30分



去年の10月。息子との間に産まれた赤ちゃんを連れて、はるばるオーストラリアメルボルンからやってきた彼女。赤ちゃんの父の息子が来ないで、代わりにイタリア人DJの女性と3人で10日間来日しました。

彼女と息子とは犬猿の仲になっていました。私は、赤ちゃんが出来たその縁を途切れさせたくない!と強く願って、来日中、精一杯の思い出作りをしました。帰国後、彼女らの滞在した綺麗に片付けられた部屋の机の上に、小さな紫色の花がたくさん着いた鉢植えと、上品で可愛いクッキーの詰め合わせが置いてありました。鉢植えの花の名前は『いわしゃじん』。品の良い小さな紫色の花が満開になっていましたが、毎日一生懸命水やりをして、お陽さまにあてているのに、花を落とし、みるみる枯れていきました。

YOO 本名柴田容子(しばたようこ)。多摩芸術学園映画科卒。働く4児の母。YOOカンパニー代表。制作兼演出・カメラマン・ヘアメイク・スタイリスト。

代表作『サボテンの眼』『月が陽気にくすんだ日』この後は作品になってないんです。

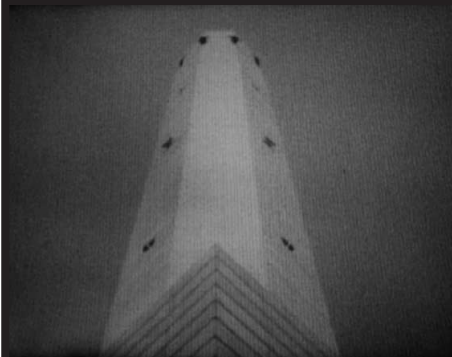
鈴木研究所フロムMプロジェクト

マテリアル／マキシマム

鈴木所長

8mm

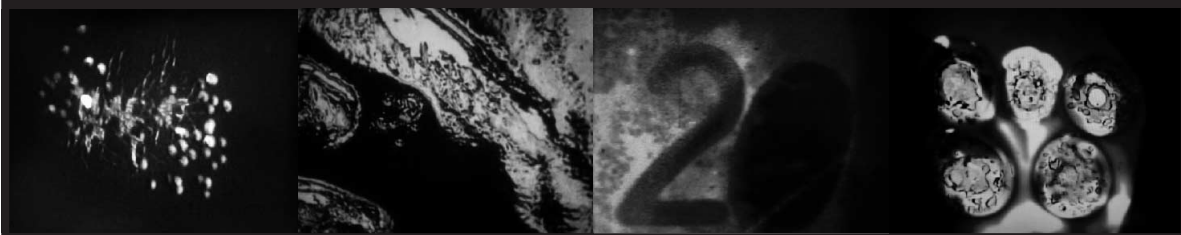
6分



Mが頭文字のタイトルの実験的な連作を「よろず屋コーナー」で発表していきます。1コマに対する集中力をどこまで高められるか!?

最近、会社で仕事の合間で8ミリフィルムを刻んで制作しています。一日のうち、使える時間が限られると集中も凝縮される気がします。

しつこくしつこく何度も何度も1コマを眺めています。



マエダ商会 「生・意・気」

午前1時頃

休憩

【お詫び】

5月は臨時休業させていただきました。
出張とかぶつてしまい、他の人には任せたくなかったので、
本当に申し訳ありません。

マエダ商会「生・意・気」とは…

マエダシゲル

まとめて見る事で発見できることがある。

話を聞いたり語り合う事で更に映画の深さ
大きさが知らなかったことに気づくかも知れ
ない。気づけば、映画はもともと面白く
なる。ハイロ映写技師の前田茂が関心を抱
いた作品や作家を特集という形式で紹介し
ていく名画座コーナーです。

早くも次回のお知らせです(ごめんな
さい)

7月は、『アッパレー時代錯誤!』山本博詩
作品特集です。

『ルパン三世実写版伯爵のお宝を奪え!』
『私立探偵MISAKI 危険なボディーガー

ド大作戦』

『私立探偵MISAKI 海風に消えたメロデ
ィー大作戦』

古典ではありません。正真正銘の200
0年度作品、純国産品。名古屋発です。しか
も、8ミリ、まさかの2トラック。今時なぜ?
そう思いませんか?

何が今時なぜ? ナノカ分からない人の方が
多いと思いますが、今時なぜ? ナノです。

賛否両論なんてナンセンスに感じてしま
う位に、無垢です。期待を裏切りません。未
だ健在。8ミリ青春の魂! を是非お見逃し
なく!!!

マエダシゲル／MAEDA Shigeru

本名前田茂(まえだしげる)。1961年、本籍鹿児島、八王子市民。東京映
像芸術学院卒。日本TVのAD、PFFの映写技師、学校事務員、太田青果
市場、文芸座の映写技師、の仕事を経て現在は国際会議同時通訳のオペ
レーター。その実体は、仕事と子守と映像作家。音痴音響作家を自称して2
ヶ月。ハイロ入団'84年、現ハイロの映写技師(6年ほど行方不明期間あり。
その間に自分で立ち上げた劇団を2年でつぶす。)。50歳、三児の父。

タケヒロ アワー

午前1時 20分頃～

タケヒロアワー

タケヒロ雄太

前コーナー「我・輪・話」は、どうにも拡がらなかった。皆、作品には触れるのに、人に触れるのが消極的。こもりっぱなしのハイロ40年の壁は意外に高い！だけどハイロは作品の溜まり場だ。作家の巣窟だ。壁なんか取っ払って、外の空気を吸って、自ら外に風を吹かせよう。

新鮮な海外実験映像や他の映画祭で上映された作品を運んできたり、更にはハイロでしか上映してない作品を海外映画祭に送ったり、「コミュニケーションの」わをもっと外側へ。

「我・輪・話」改め「タケヒロアワー」

…ナンですが…

私の計画不足から、予定していた「アメリカ学生映像」の上映が適いませんでした。まだ連絡を取り合っていますが、正直18日までに間に合わないと思います。楽しみに来場して下さった皆様、ごめんなさい。

今月は2011年イメージフォーラムで上映されたタケヒロ雄太作品「あめやさめ」を上映致します。

あめやさめ 2011

タケヒロ雄太

miniDV

70分

2010年1月、じいちゃんが抗癌剤の治療をやめた。人の生き様と死に様、それは滴れ落ちた雨粒の様に、静かに一瞬の美しさをみせ、消えていく。同じ11月3日に生まれた私とじいちゃんの、一歩ずつ、強く真っすぐに向き合う時間。

タケヒロ雄太／TAKEHIRO Yuta

本名中村雄太（なかむらたけひろ）。小学生の頃は『時間の大切さ』って曖昧に捉えていたし、なかなか一日が長かったけれど、もう30になって一日がトイレするかの様に早い。だから『時間の大切さ』はもっと曖昧になった気がする。今まで色々経験してきたけれど、スクリーンに自分の映像が映っている時間だけは少し大切にできてきたと、飲み慣れたビール片手に思う。

人ひら

川田夏実

詩の朗読＋DVD上映



春にまた、人がひらひらと舞っています。ひとりひらひらひとりひらひら。いつか見た景色、いつも見る景色、また見る景色。季節は絶えず巡るけど、桜は毎年散るけれど、手のひら中、花びら一枚。このあなたに二度と巡り会うことはないのです。だから私は切ないのです。

川田夏実／KAWADA Nathumi

梶ヶ谷生まれ栃木育ち。宮崎台、長津田、富良野、荻窪を経て、現在地、再び栃木。

オトナじゃない

白木羽澄

8ミリ

12分

近頃、時折オトナになる。大人ぶった態度をしてしまう。だけど本当は違う。だからこの作品を作ろうって思った。もっともっと泣き叫んでいたい。

白木羽澄／SHIRAKI Hasumi

今月の14日で22歳になります。

もうすぐ22歳。この文字が刷られている頃には既に22歳。先日10年ぶりに父と会話をしました。

午前2時 50分頃～

青を殺す

佐々木望円

8mm

15分



けものの色はしろ
世界はつづくので、ちゃんと殺します／いた、いる、いるね／
そうやって世界とつながっているんだねって言った

佐々木望円／SASAKI Nozomi

ずっと青森にいました。

今はエレベーターであがって、20歳になって、405号室に住んでいます。なんだってできるようになりました。

遺言シリーズです。何年前の作品だったかな?前年に「音をつけるって正しい言い方なのか?」ってところから音響作家内野さんとのコラボレーションを初めた(『閉じた目』)んだから・・・です。今の作品作りのスタンスはこの頃からだということです。あっ、ファインダーはのぞいてます。ラストシーンなんかグー!っと見入ってます。それからパフォーマンス部分は5人のカメラマンが勝手に撮ってます。パフォーマンスとの絡みも含めて、ここかしこで「良い加減」を求めているのが自分では分かります。個人には目を向けないように無理しているのも自分では分かります。だから結構ロマンチック好き。

1012年8月5日[日]15時～ 幻のほしの3時間劇映画

『背中ではな子』

東京目黒・碑文谷 アピアで上映決定!

*14時～冬のどどんが団ライブ、19時～土居晴夏ライブ、
20時～火取ゆきライブ

*全部見ても2,000円、学割で1,500円) お見逃し無く!

内野徹/TORU Uchino

1971年生まれ。家庭用ビデオデッキがない時代、テレビの音声をテープに録音し、繰り返し聞くことで「映像から切り離された音」「聞くことを通じて想像で見る映像」の面白さにはまる。

多摩美術大を卒業後、ミキシングエンジニアを経て、同大学で助手。在職中、ほしのあきら氏との「映像×音による衝突のモンタージュ作品」を4本作成し、発表。また、音風景をテーマに作品制作すると共に同テーマの授業も担当。その他に数々のアートプロジェクトのマネジメント、ワークショップのファシリテーションを務める。多摩美術大退職後は、仲間と立ち上げたNPOを基盤に東京、小田原、大阪などでワークショップを展開したり、なぜかIT業界でマネジメント職に就いたりしている。最近では自分の「身体と暮らし」に興味があり、ボルダリングと部活動(自給自足部)が何かと中心。

座右の銘は「まあだいたいそんな感じで」

終わりは午前5時を予定しています。

ありがとうございました。

次回は 夏のフリースペース

2012年7月20日(金) 午後11時からオールナイト

- マエダ商会 お待たせ山本博詩作品集
- タケヒロアワー 今度こそアメリカ学生映像祭り
- よろず屋コーナー 作品募集

閉め切り:2012年6月30日[土]

[ただし、マエダ商会新装開店のためよろず屋の総上映時間枠は90分(先着90分)。]

瞬刊ハイロ作品紹介欄の写真掲載希望があれば添付して下さい。

送り先:dodonga2-5-5@hotmail.co.jp ほしの あきら

鈴木所長

タケヒロ雄太

マエダシゲル

Yoo

「空だけが逆さに見えない」

40分/DVD ◆梅宮雅夫

●『震災』と『戦争』の異なる題材が私には、どうも繋がらず、どこに気持ちを持っていかばいいかわからなかった。インタビューシーンも、暗く表情が伺えず何が聞きたかったのかも曖昧になってしまっている。せつかくの長い上映時間なのでテーマ別にまとめた方が焦点が絞れる気がする。(鈴木)

●戦争と震災が映し出された映像は、私には至極『記号的』な印象があった。それは私自身がどちらも経験していない事実が、あたかもフィクションの様に感じさせたからだ。フィックスで撮られた戦争を語る老人、今なお残る瓦礫の山の物量が物語る壮絶な傷痕。作者は両者に対し何も出来ない干渉出来ない。圧倒的巨大なエネルギーを前に、現実には確かに起きた事実が、まるでフィクションの様にすら思えてくる。だからこそ手持ちで撮影された〈空〉だけが紛れもない現実・ノンフィクションになっていた。(タケヒロ)

●3/11後の現場に自転車で渡り撮影した風景、戦争の体験を語る老人のインタビュー、公園で綱渡りをして遊ぶ子供の情景。無関係にみえる三つの映像を編集してみせることで、視点を限定しないで、もっと広い視野から3/11を考察しようとしている。それは、映画を作る行為を通して、大げさに言えば「人間とは何か」と問いかけ、探しているようでもある。(マエダ)

●3/11後の被災地をロケして、現実の自分の周りにもいた過酷な状況を経験した人物のインタビューをいれた作品で、冒頭につながっている戦争実録映像が重く長い為に、運命に逆らえない境遇がリンクしているように感じて面白かった。何も知らずに平静を過しているんだらうなと思わせる公園で遊ぶ少年達に、彼らがこれから何をしていくんだらうという期待が余韻として残った。(Yoo)



「ゼア イズ サムワン」

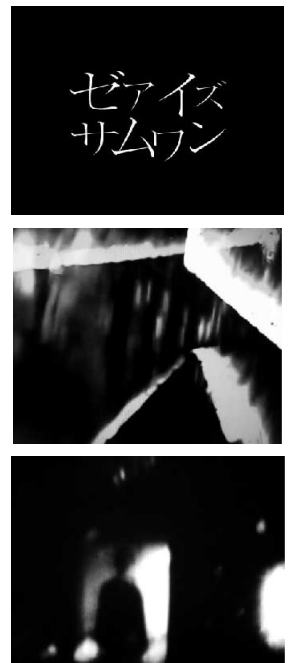
8ミリ/24コマ/30分/音源CD出し ◆鈴木所長

●(自作)ようやくスタートラインに立てた気がする。十年続けた『鈴木研究所』は大いなる糧となった。(鈴木)

●〈技術〉が技術に見えない。手工が現象へと昇華していく。その熱量が渦をなしてフィルムに1コマに詰められる。全ての繋がりがこそ未だ曖昧だが、『もの』の『マテリアル』につけた『傷Ⅱ時間』の、これは二つの物語だ。(タケヒロ)

●AからZまでのアルファベットの頭文字で始まるタイトルをテーマとして、1年をかけて手作業でフィルムを削ったり焦がしたり漂白したり自家現像したりして発表してきた作品を、さらに大胆に構成しなおした。24コマという間欠運動のリズム、映画が残像で成り立つことを、まさにフィルムを1コマ1コマ長い年月をかけて触ることで掴み取った作者は、自信と大胆さで見るものを揺さぶり挑発してくる。シネカリが繊細だがどこか迫力にかけるといった認識しかなければ、この作品を見ればそういった価値観が変わることは間違いない。(マエダ)

●今まで見た8ミリフィルムの加工作品の中では一番興奮した作品だ。二次元だったのが、加工画面の奥に実写映像が見えて、偶然性と世俗的なメッセージが加わって面白かった。唐突に現れる女性の映像と、ダービー会場風景の労働者とのつながりが、裏社会のエネルギーの表現なのか、泥臭さを魅せたいのか、良く解らなかつた。単語を繋ぐように編集するのでは無く、作品一本のお話で映像が繋がるともつと良いのでは無いかと思った作品だ。(Yoo)



「とりさんの冒険」

くもしも夕方に消えてなくなるならさよならを言う相手を探してゝ

16分／DVD ◆室井夏海

●オレンジ色の鉄塔と少女の後ろ姿が印象的でどことなく、物悲しさが『つげ義春』の世界観を感じ。微笑ましいせつなさがある映画。(鈴木)

●夕陽に包まれると消えてしまう女の子の影。罨すらと消えていく画達は、自らに宛てた慕情の詩。その様は温かくも、哀しみを帯びている。

架空だった詩が、徐々に作者自身が過去に積み重ねてきたであろう本当の想いとして伝わってくる。架空／妄想と現実との違い。それがこの作品の「幅」を生み出している。(タケヒロ)

●森の中に消えていく背中。背中越しに振り返る姿が繰り返される。正面からの表情が見えない。けれど儚い作者の想いが伝わる。ふと、高村光太郎の智恵子抄を彷彿した。中年の偏見だろうが、今時の若い人に智恵子抄のような愛の求め方がみえたのが面白かった。(マエダ)

●少女の駆ける後ろ姿を追いかける映像が、作品のどこどこに印象的に繋がって、みかん畑に見え隠れする少女の身体や顔に、日常とかけ離れたところで、霞みだけで生きていける妖精に見えてくる作品。あどけない少女の表情に、小さく笑ってしまいそうな作品になっている。永遠の少女をおいかけて、まるで蝶を追って、追って、見知らぬ土地に迷い混んでしまった事を幼い少女が、困惑しているような作りの作品になつてくるとも面白いのではないかと思つた。(Yoo) *そう言う映画ではないのに、そうなればというのとはどにか??そういう言い方は批評の暴力だと思う。(編集部)

「朝を迎えに行く」

8ミリ／11分／音源CD出し ◆野村汐里

●冒頭の走っている顔に引き込まれる。何年かに一度は出会う、勢いさがうらやましくなる映画。単に暴走しているわけでもなく、映画としてラストカットに向かっているのが、計算なのか感覚なのか分からないが、しばらくこのまま全身で弾けてほしい。(鈴木)

●刹那な淡い光が照らされて、「どこかに私を連れ出して欲しい」と願いながら作者自身が佇む玄関のカット。光に向かえば何かが変わるのか、変わらないのか。分からないから走りたくなる衝動は、へ何かに向かっていこうとするその行動に変化し、行動は作者の生き様になろうと必死だ。だから地平線まで走れ!(タケヒロ)

●鹿児島県の国分海岸。海に向かって霧島に見える穏やかな内海。そこで作者はもがく。包帯を全身に巻きつけ、その海の中でもがく、もがく。だが、生活と家族の風景の向こう側が私には見えなかった。海から這い上がって、日が沈むのを狙ってねばって撮影した長廻しは凄い。がんばれ薩摩おこじよ!(マエダ)

● 狂気に走る女の情念が、エネルギーに力強く繋がっている映像にドキドキする作品だ。何かに不満でどうしても拭えない苛立ちやありあまるストレス。This too shall pass.なんて我慢できないといわんばかりの女の動きと臨場感あふれるカメラワークが絶妙な作品。引きずられる布に朝日が眩しい最後のカットが、次に新しい何かをつかもうとする意思を感じる作品になつている。(Yoo)

「10ス」

〜消えてなくなるならさよならを言う相手を探して〜

3分/DVD ◆菅原里美

●絵の具を混ぜ合わすなど、もっといろいろな表現出来るような可能性があるのに、ドライなのかあきらめが早いのか、意外とあっさりエンディングを向かえているのが残念。もっと観たかった。もっとしつこくてもよかった。(鈴木)

●作者の迷いが、迷いのままに伝わってくる。それは曲がりない自己投影映像である。カメラを持つ手、映す時間、現在の気分。もっと意を決して、いっそ画面からはみ出す程の迷いを魅せて欲しい。(タケヒロ)

●確かに、あの日ハイロで菅原さんは目に涙をためていた。誘われて映画を上映したただけなのに何故、衆目の席上でここまで酷評されなければならないのか。でもその時菅原さんは歯を喰いしばっていた。そしてシネマフェストに新作を持ってきた。変わった。撮ることを自分に引き寄せた。映画が見慣れた映像の模倣でなく、もっと個人に引き寄せられることで、映画に対する姿勢が個人と向き合うことで、さらに映画が他にはない広がりを生む。ここから映画がひとつ生まれるかも知れない。そんな可能性を期待させた。(マエダ)

●日常のイライラや、怒りを感じる作者独自の心情風景だと感じられる作品。作者本人の目と、カメラの焦点が同期すれば、素晴らしい彼女なりの世界が構築できそうな期待できる作品だ。絵の具を混ぜるシーンの筆先や、無造作に振られて映る壁(足の動きなどのカットの終わりに必ず締めるアクション)が見えて、しかもそれが妙に乱暴に見えて、毒のある本音がちらついて見えた気がする。しっかり見えて、構えて、積み重ねてゆけば、もっとよくなる作品になってゆくと思う。(Yoo)

「きょうのいきもの」

26分/DVD ◆田中裕貴子

●あなたは、ファールブルですか?。と言うくらいいきものが作者に寄ってくる。人も虫もゆるりとした時間の中で様々な表情をみせてくれる。作者は、へいきもの(虫も人も)同じ視線でたんたんとした時間の流れで記録している。お茶でもすすりながら、ずっと観ていられる映画。(鈴木)

●この作者自身にしか向けられない(真似出来ない)映像。それは自分のスタイルを曲げなかった事実だと思う。フレームの外に一緒に存在する(いきもの)たちと、彼女がじつくりと見つめる時間が確かな世界観を構築していく。

虫(実物のいきもの)の合間に入る日常的な風景こそ、田中さんの息遣いが潜んでいるのだと確信出来る。(タケヒロ)

●生き物。小さな虫をみつめる作者の独特の視線がユニーク。小さな虫の向こうにある人の静かな営みが聞こえてくる。そんな奥行きを持った映像。過ぎていく時間に愛おしくやさしく耳を傾ける、音のありよう、まったりした映画の流れも面白い。(マエダ)



●作者の周りに、これまで起きた予期せぬ出来事をいきもの達が救うように、繋いでくれていたようなほのぼのとした作品。作者を取り巻く人々との会話にも、優しさと穏やかさを感じる。作者の見た目が素直に、まっすぐ現実を捉えて、同じ時間を共有している「生き物」がいきもの独自の時間で生きているという事を感じられる作品。取り乱しても構わないから、と言ってあげたくなるような、現実を自分の時間に変えた素晴らしい作品。(Yoo)

「真夜中2時過ぎ」

9分10秒／DVD ◆三輪圭志

●夜中に走り続ける自分を見せつけ、荒い息づかいを観客にぶつけた作品。理由は分からないが、日本的なものを感じた。どうせなら朝まで走りきって陽を浴びてほしかった。汗の匂いを伝えるのはむずかしい。(鈴木)

●何だっけ出来る事は大いなる迷いに繋がるけれど、この作者はそんなものは一切ない！あるのは、ただ青春のどうにもならない憤りとがむしゃらな高揚感。これが一番映像に映らないものだと私は思う。頭じゃなく身体で、大声で叫ぶ声が快感。(タケヒロ)

●作者の童貞喪失が作品にどう影響したのか。俗っぽいのは承知でそう問い掛けるのは、そんなの関係ない！影響ないと私が思っているからである。カメラを持って真夜中過ぎに走り出す。作者と一体になつてのカメラの映像、それを捕らえる音はダイレクトゆえに、それなりの印象を残すがそれ以上でもそれ以下でもない。それは、現実を写したに留まっていた。作品初体験の後、作者の意識や心象を表す表現としてカメラと向き合うのか？そんな課題を感じた。(マエダ)

●都会の真夜中の風景の中に風を切つて走る走る映像から始まる。息を切らせて、カラダと一緒に揺れるカメラが見た風景。静かな時間を切り抜ける強い若者のパッションを感じた。だが、全身を使って吠える声も大きな闇に飲み込まれてしまう。それは脱皮をしている蟬のような弱々しい初な身体がだんだんと出来上がっていくような、そんな感触を得た。道路に置いたカメラを予期なく車がまたいで通り過ぎるシーンに、偶然の必然に左右される人間の存在を感じた。(Yoo)

「泥棒の堂々巡り」

13分／8ミリ ◆大倉みなみ

●白い景色が印象的で日本画的と言うか、色ににじむ感じが心地よい白昼夢の様な映画。(鈴木)

●ファーストカットの食器棚に溜まるほこりから、ゆっくりと引いていく画は、忍ぶ僅かな気配(泥棒)を思わせる。ワンカットワンカット、「うつれー」と念じたかの様に、カメラが映像の反射を受け入れていく。静かに静かに作者も息をもっと殺して撮影したら、画面には『泥棒』が現れたかも。(タケヒロ)

●作者のまなざし、身体の動きと一体になったカメラ。大根を引き抜くハレーシヨ、自家現像の傷さえも家庭的な手触りで、作品として受け入れてしまふ。その許容に母性的な大きさを感じてしまふ。(マエダ)

●暗い台所のパンナップから始まるオープニング。汽笛の聞こえる街の空家での風景を見つめているのか、間違つてシャッターが押されてしまったのか、不思議な狭間を感じた。どういう仕組みで構成されているのか、全く予測できない作品。もしかしたら、とんでもない感性の持ち主で、今までにない映像作品を作ってしまうのではないかと、これからの彼女に期待させられる。(Yoo)

「F64のお見舞い波の音を聴きながら」

17分 / DVD ◆YOO

●作者と目の前にいる人の関係性が見えてこないのは作品の時間の短かさとイメージ映像をはさむ事でばやけてしまっているせいか。これで良しとしてしまう姿勢が非常に、もったいない。(鈴木)

●病室のベッドで苦しむ叔父との過去の会話を、作者が思い出しながらカメラをまわしている。と聞いて初めて作品が理解出来たのは、作者自身が本気で叔父と向き合ってなかったからだ。私は作者に理解して欲しい。病室で苦しむ叔父の、か細く儚い呼吸の様を感傷的に想うのでなく、カメラを向ける事、またスクリーンに映し出された映像が観客にどう伝わるのか意識しているなら、きつと水の上を行くアメンボのカットも、作者の切なさに見えたはず。(タケヒロ)

●死を撮る事を前にした作者の想い・決意が見えない。編集や音でステレオタイプの想いに置き換えられてしまう。もつとわがままでいいし、空気を読めなければ居直ればいいはずだ。ぶつかることから逃げていて。だから、撮ることで発生したはずの反動がない。せつかくの驚きを逃がしている。作者に問いたい。情念の関係を怖がっているように見えるが、どうだろう。(マエダ)

●(自作)見せたくても怖くて撮影できないもどかしさが、まとまりのない作品にしてしまった。お別れを目前にした白い部屋の中のベッドと小さく重なってしまった病人。見舞った家族の手と、臍臍とする病人の力無い手。しかし全体として何を思いつくようにまとめたのか、絞り込めていない中途半端な映像。作り手の考え込んでいないつなぎは、作品に乘れない拒絶を生む。(Yoo)

「浮かれ鳥かえるつ」

200秒 / 8ミリ

◆花岡梓 タケヒロ雄太 清水朋代

●プロローグとしては、これからを期待できそうだが、一個の作品としては予告編で終わってしまった感がある。作者三人の感覚が似ているのか、それぞれのカットにさほど違和感を感じなかった。(鈴木)

●(自作)三人一本。一年間意地でもやり続けたけども、ひとつも作品にはなっていない……し答えもない。ただ、輪を作る事も拵げる事も、ワンクリックで出来るSNSみたいには簡単じゃない。浮かれ鳥がこれから何処へ還るのか、もつと探し続けていければ。(タケヒロ)

●3人の組でコラボレーションして1作品を作ることに拘った1年。そのまとめとしてシネマフェストに向けて作られた1本。残念ながら失敗作。でもタケヒロさんが拘った3人で1作品を作るという試みを続けたことの意義は大きい。馴れ合いでなく、ぶつかり融けあい跳ね除け解散も覚悟して新境地を目指すことがコラボレーションだと、この過程の失敗から知らされた。(マエダ)

●三人チームのそれぞれの目が、三重撮影した1本のフィルムに200秒の作品に仕上げられている。馬の身体の筋肉や日常とはかけ離れた風景。三重撮影の偶然から見えてくる映像には、三つの目がちぐはぐになったり、ミックスされたり可笑しなリズムがあり、新しい見え方を見る者に発見させるような、模索させるような習作。これから続けられるだろう作品の行方に希望を抱ける。(Yoo)

「ライツ・スペンズ・ライフ」

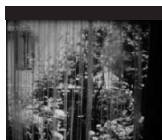
25分 / Super 8 ◆大西健児

●なによりもブレない姿勢に勇気が出る。映画として8ミリを映画するこの作品はフィルムに対する執着が微笑ましく、且つそういった編集力を体感させられる。(鈴木)

●大西さんの作品は正直いつも好きじゃない。今回の作品にワンカットだけ映っていた私の顔も酷く疲れた表情で、そんなところ「撮るな」って思った隙だらけのところを撃たれた気分。まさに「shotll撮影」。はつきり言えるのは、作者の8mmへの執着と愛情は嫉妬にも似た感覚をおぼえる。ただただ経過していく時間に、「握りの愁いを込めているのは、『美しさ』と『瞬の儚さ』」。(タケヒロ)

●日頃から撮りためたフィルムを日記のように表した作品。3/11の時に崩れ散らかったフィルムを整理する作者、ハイロの上映会の様子、路上の喧嘩の虚構風景が大西さんのモノローグにのせて編集される。とにかくカメラを手放すことなくシャッターを押す作者に感服してしまう。自家現像ももはや作者の世界の手中にある。他に無い大西ワールドは確かにある。その膨大な日記記録の作品が量となって提示された時こそ世紀末がやってくると思う。だが、最後まで8ミリフィルムとつきあおうという覚悟も、気負いを突き抜けた透明感になって作品にさわやかな感じを与えている。(マエダ)

●過去に自分が見ていたハイロ上映会と作者の舌打ちする音。作者の部屋らしい風景に見えている沢山のフィルム缶を整理する人。時間の軸がはつきり見えて、映像のもたらす過去の時間と現在の時間が繋がって、緩やかに見られる、おおらかな優しさを感じる作品だ。作品の流れに、「一緒に揺られてみたくなる。ベテランらしいカメラ裁きも絶妙で、作者の見てきた二年間の年表を大西節にのせて、見せてくれる。(Yoo)



「眼を開ける」

◆チーム8ミリ天国IIほしのあきら、横溝千夏、マエダシゲル

●見えるか見えないか、聞こえるか聞こえないかのギリギリのせんをつらぬいた意欲作。一歩まちがえれば何も見えない、薄目を開けて景色を覗いているきわどさが良い。瞳孔が開く瞬間の光に対して、闇の部分をもっと覗きたかった。マエダさんのコメントが勝負する前から負けているとしか聞こえず、作中にマエダさんの存在はかき消されていた。(鈴木)

●至極些細な事、呼吸をする様に当たり前にしている「瞬きは、実は光りで構成された私たちの、日常の輪郭を意識するための繊細な行為である。フィルム1/24コマと同じように尊い行為を私たちは無意識にしているのだ。瞬きの後の瞬、眼に飛び込んだ大量の光が当たり前の風景をみせるまでの白い1コマ。不思議なのは何故かその1コマに作者達(男二人女一人の三人で創っている)の背中がみえてくる。感じた事のないユニセックス感、つまり限りなくグレーに近い白のような、深みのある「白」を感じる事が出来る。光に「きえていく」瞬間に新しい明日を予感する、そんな次の時間への優しい期待が見えてくる映画。(タケヒロ)

●(自作)見えない画面と聞こえない音でどこまで映画を成立させられるか、で始まった。限りなくフィルムに「光を取り込みながら「撮ること」の執着から離れていくほしのの映像と、撮る対象へのこだわりを探し求めようとする執着のマエダの映像。自分の音感世界に独特のこだわりを持つ横溝の音と、「俺は音痴だ!」を自称するマエダの音。その「コラボレーション」。ただ、そのぶつかり合いだけからこの映画は生まれたわけではない。溶け合うものがあつたり、離れはじかれるものがあつたり、作る過程のインスピレーションから新たな映像を取り入れて、1年をかけて生まれた作品。何を受け入れ、どこをはじくか。三者のセンスと器の格闘でもあった。万人受けする作品ではなかったが、感動する人にはたまらない魅力を持った作品になったと思う。(マエダ)

●眩しいくらいに感じる光にタンポポの空抜けの映像が見えてない映像に重なるのか、音があるのか、聞こえていたのか...錯覚と混乱の流れの中に、彼方から聞こえてくるピアノの旋律。遠い昔の時間を感じた。予測できないままに繋がっていく風景の余韻が、体験したことのない不思議な気持ちにさせる。計画を超えたそれぞれの編集と、計画を超えた画面と音の出会いが、上手く溶け込んだ作品だ。(Yoo)

震災との関わりを見せた中年映画たち

フェスト総括に変えて

大房さん

セフテンバー11「9・11」というオムニバス映画がある。ニューヨークの同時多発テロ事件からちょうど二年後の2002年9月11日同時刻に全世界で放送された。今村昌平、シヨーン・ペンを始め、世界中の11人の監督が、それぞれ1分9秒で作った映画なのだが、決してテロを非難する内容ではなく、テロを行う側に眼を向けたり、犯人と疑われるアラブ系アメリカ人を主人公にしたり、アメリカ側の視点ではない。要するにそれぞれの個人が、テロを契機にしている。ちなみに、この映画は全世界で上映されたが、まだテロへの憎しみの強いアメリカでは放送されなかった。

こんな話を思い出したのは、震災から1年後、日本のメディアでは震災の映像的な総括が行われた感じがしなかったからだ。数々の映画が現地で撮影されているにもかかわらず、なんだか形になって見えてこない。

震災では、膨大な映像が撮影され、公開された。映像を作っている者なら、あの圧倒的な映像の力に対して、何かを感じざるを得なかったろう。だとしたら、それに対して、何か作家なりの答えが必要ではないか、またその必要性を考えるべきではないか。そう考えていたときにハイロのフェストがあった。

フェストには、それぞれの作家が1年のまと

めとして作品を持ってくる。その作品は、ある意味で一年をそれぞれの作家がどう生きてどう感じたかの「3/11」になっていたはずなのだ。

今回のフェストでは、特に中年たちの作品それぞれが、震災とのかかわりを見せていた。大西健児『ライツ・スヘンズ・ライフ』では、いつもの作品と同様に作者の日常が被災した自分の部屋の風景として映し出され、その映像を見ながらの淡々とした独白によつて、今年が語られる。それは、震災があつてもいままでと変わらずに、私はカメラを回し続ける。という宣言をしているようにも見える。大西にとつて、震災も日常の中につか消えていくものであり、そうなるべきだと考えているように見える。ただ、大西作品の連作はひとつのクロニクル(年代記)として見ることもできる。そういった視点で見たとき、今年の大西作品の価値が数年後改めて見えてくるかもしれない。

震災を目の前の現実として記録し、再構成しようとしたのが、梅宮雅夫『空だけが逆さに見えない』といえるだろう。実際に被災地に出かけてカメラを回した映像をもとにしたながらも、震災とはまったく関係の無い、戦争体験を語る老人インタビューや公園での大道芸などを交えて複雑な構造にしている。あつた

ことを、そのまま見せるのではなく、それを再構成することで、もともと持っていた映像の意味をはぎとっていく手法だ。震災映像を何と組み合わせるのは自由なはずなのに、その自由さでさえ捨てている多くの映像作品に比べて、この作品はあらためて「自由だよ。映像は」といっているように見える。

また、作品を作る姿勢として、これも震災と向き合っていると言えるのが鈴木宏忠『ゼアイズサムワン』だ。フィルムに直接、手の痕跡を刻み込んでいくこの作品は、一年間でAからZまでアルファベット一文字づつをテーマにした小品を作り、それをまとめて、この作品となったのだが、その過程で作者は、さらに手を加え、まったく違う作品として仕上げてきた。それはまるで2011年を大きな区切りにしようとする決意のあらわれのように見えるのだ。

その意味で、さらに区切りを人生の終わりにまで広げようとしたのがチーム8ミリ天国ほしのあきら、マエダシゲル、横溝千夏の「目を開ける」だ。ほしのあきらのカメラは、この作品で、ここ数年取り組んでいる「無私」のカメラとも言える方法にさらに踏み込んで、今までにない境地に至っている。カメラは、もはや何も見ていないし、何も撮っていないのだ。かつて、ある画家は「私が透明に抜け落ちて風景だけが残り」と、自らの作品の理想を述べた。つまり、風景に何か「私」を加えるのではなく、私の見たままの風景をそのまま絵画に

できないかと言う意味だ。カメラの登場で風景をそのまま提示することなど、簡単にできるようになってしまった今、「じゃあ写真で良いじゃん」といわれるかもしれない。しかし作家の有り様の極北として、今でも根強い考え方のひとつだろう。ひるがえつて、映画はどうだろう。風景を写す装置であつたはずのカメラは、もともと、「私」の入る余地は少なかつた。しかし、多くの作家たちが、カメラを持って自分なりに風景を切り取ることで、そこに感情や意味を与えることができる気がつき、さまざまな表現に挑んできた。しかし、「目を開ける」では、そのカメラを持つ私が透明になるうとしていくのだ。もはや「何が写っているのか」が映像の価値を左右しない、そして撮っているという行為も、やがて抜け落ちていく、そして枠、フレームだけが残る。これもまた、極北の作家像、作品像といえるのではないだろうか。ここまでの映像を撮ったら、もう後が無いのではないかと思えてくる。しかし、救いというか、この作品のしたかなところは、共同制作している前田茂の、よく言えば地に足のついた、言い方を変えれば、俗っぽいカメラによつて、突然現世まで引き寄せられるところだ。まだ荒削りだが、この作品には、繊細な抽象画と俗っぽい看板が同居した魅力が見え隠れしている。これからさらに改作していくというこの作品の、聖と俗の危ういバランスが、最終的にどこに落ち着くのか、再度上映される機会を待ちたいと思う。

どこの誰の どんな作品 でも 上映する

あの時 わを れす、 な

ハイロ鑑長 ほしのあきら

“どこの誰のどんな作品でも上映する”というポリシーなきポリシーを片手に1970年(昭和45年)10月、時代が急速にしらけに流れ込んでいく中でハイロは誕生したんです。

特に作家として秀でた者がいたわけではなく、そこにスペースラボラトリー・ヘアー(現在のアピアの前身、渋谷アピア)という「場」があったんですね。ヘアーというのは長髪のこと、つまり反体制のシンボルなんです。そこから生まれたハイロの精神は「時代に抗う」だったんです。

同じような(抗い)の場は各地で生まれていました。しかし今も続いているのは、(私が

知っている限り)ハイロと岡山のペバーランドと、そして美学校ぐらいでしょうか。

「アンダーグラウンド」とか「闇」とか「エンバイラメント」とか、よく分かつてはいない言葉にゾクゾクし、レンズに灰が落ちる映画(これは故森田芳光君の隠れデビュー作)や延々と何も映し出されない画面を喰い入るように見つめ、拍手したもんです。どの作品も単純なアイデアで上手さなんて持ち合わせていなかったんですが、込めようとしたのは抗う精神だったんです。逆に単なるアイデアだけの作品を見抜こうと必死で、テレビでも真似ようものなら野次の嵐、誰も歓迎しない、そんな緊張感が送り手と受けての間にあった……ように思いますね。

ハイロも(もちろんアピアも)ペバーランドも美学校も、そして消えていった多くの空間も「精神の発露の場」たり得ようとするエネルギーだった……だったと思っています。

四二年が経とうとしているハイロは私にとつてはもうライフワークと言えます。で、多くの人間にとっては「通過していく場」であり、またある人には「自己実現の場」なんです。森田芳光はハイロで8ミリでの自己表現に目覚め、8ミリ作品で自分をアピールして、助監督経験無しで劇場監督になりました。園子温は毎月ハイロの上映会で作品を直し

続けてPFFに入賞して現在も活躍しています。山崎敏男は独りで8ミリ製作を続けていたけれど、ふとしたことでハイロを知って製作環境が整って活動を広げ、五日市映画祭のグランプリを受賞して……受賞を知らないままにこの世を去りました。

ハイロの歴史は1970年の発足からメンバーの個展を日替わりでやった75年頃までが「序章」で、これはもう伝説ですね。地方のグループと交流し作品と映写機持って出かけて行った75年から80年頃までの「発展期」、企画上映に頼り過ぎた80年から85年頃までの「失速期」、そして85年からの「暗黒期」……メンバーが二人去り二人去り、現代表の大房さんがアピアの伊東夫妻の助けを借りながら独りで続けていたのです……二度は飛び出した私が、帰れるところを守つてくれた大房さんにはただただ感謝しかありません。彼がやめるというまでは続けなくては男がする……というものです。

そして92年頃から以降の「再構築期」です。この「暗黒期」から「再構築期」への変化の時に私を含めた出戻りが3名戻って来ました。現在のメンバーの半数です。現在進行形の「再構築期」が一番長いのはちょっと意外かも知れませんが、これは意識の上のことなんだから、しごく健康的なんです。(次ページへ)

で、これが伝説になればいいんですよ。そのためには「あの時を忘れない」

…あの時つて二体いつのことなのか



さいきん気づいたことがあるんです。

自分の作品つて世間から無視されることが多いのは映画のマンナカじゃないからだつて。自分の中ではいつでもと真ん中なんだけれど、大きな世界からすれば私のと真ん中は端っこで、だからマンナカ見てる人からは見えな

いんだつて。

別に卑下しているんでも拗ねてるんでもなくて、アーそうだ俺は端こだったつていう、ただそれだけなんです。端っこがあるからマンナカが分かる。端っこがマンナカから遠ければ遠いほど世界は広がる。マンナカは狭いけど端っこは広いし限りがない。もつと端っこにいける可能性がある。ということなんです。ハイロの上映会が面白いのはいろんな端っこ

(の可能性)が見られるつてことなんです。だから作家も観客もその覚悟は必要なんです。表現したい人つて「今は端っこにいるけど、本当はマンナカにいるはずなんだ」とか、「いかはマンナカになるはずだ」とか思っていることが多いんですよ。そうじゃなくて「俺は端っこだ」って理解したり意識すると『今』の捉え方が変わってくる。作つてる気持ちとか見え

ている気持ちとか自分のアビールの仕方が変わってくる…偽りじゃなくなるつて言うのかもしれない。自分も観客ももつと素直に受け入れられるつて言うのかもしれない。

作者は「素」を出すのが一番いいですよ。

それが個性であり、良さだから。でも多くの人は、その時に見えてる有名な監督やタッチをなぞろうとするんでしょね。あんな風になりたいとか、こんなものを作りたいとか、それがこだわりになつてそれ以上にはなつていかないし、自分が見つけられないつていうことあるんですね。でもそんなもの求めてる観客つていないですよ。黒澤明は黒澤明で、スタン・ブラッケージはスタン・ブラッケージであつて首のすげ替えなんて誰も期待してないですよね。

自分の今の立ち位置をいつも自覚してそれを精一杯表現しようとする…もつと多くの人がそうやって作つたり見せたりしていくと、世界はもつともつと広さと深さを見せてくれて面白くなると、思うんですけどね。

つまり、あのときつてそう言うことかなと…ハイロが生まれた背景つてそう言うことかな…と。

言い忘れました。これが編集後記です。盟友神山昇(瞬刊ハイロの生みの親です)と組んで(最後まで)やります。きちんとやろうと思います。

立ち位置の自覚

ほしのあきら／HOSHINO Akira

本名星野章:映像作家／大学教授／和太鼓作曲・演奏者。

1970年ハイロ発足時に代表に祭り上げられた唯一のハイロ創立メンバー。そこから有頂天人生がスタート。初めて会った作者に「こんな映画燃やせ!」などと鬼キャラで売っていたが、某別団体(当時の名前はアンダーグラウンドセンター、今は…友好的関係ですから)の「ハイロは☆のがお山の大将」発言聞いて、すっぱりやめて別の上映グループ作ったのが85年。失敗して97年に出席るも温かく受け入れられ、また有頂天。今は…見ての通り。

PFFでの変態映画の父とか、フィルムメイキングの著者とか、昔の名前が重苦しくてかった。今の私は素人と太鼓作曲家兼演奏家。「チーム8ミリ天国」ボス横溝のミッションで年1本のペースで8ミリ作家(最新作『目を開ける』)。これからは4×5写真作家という肩書きで自分を縛っちゃおうかと考えながら実行せずに早1年と7ヶ月の夜。昨年からハイロ鑑長を名乗っています。

神山昇／KAMIYAMA Noboru

商業デザイン・アートディレクター。

ハイロ創立メンバー。

商業デザインは、いかにして「売れるか」を社会的で洗練された手腕で表現するものである。売れなければならないと同時に詐欺のように消費者を傷つけてはならない。つまりモラルに拘束されつつ斬新な表現が求められる。これらにおいて最も不自由な元は「クライアント」である。瞬刊ハイロは、「クライアント」が僕になると言うことです。ヨロシク。

フィルムが無くなるときの
フィルムメイキング

映像解体技術

ほしのあきら

第1回

映像技術を教える



『フィルムメイキング』（フィルムアート社）という本を出してから37年になる。出版社のせいせい5千部という読みを裏切つて、その10倍以上売れた（らしい）。その後いくつかの出版社から同様な執筆を依頼されたが、断つた。

理由は、文章がへたくそだと分かったこと。もうひとつ、書いている内容に対して自分が深く分かつていないこと。そう言うことを書きたいんじゃない！そう言うことなのか？という自問自答だらけだった。もつと体の中から自然に言葉が出なければ。他の人には書けないものが書けなければ。

そう思っているうちに37年が経つた。今なら書ける！と思った訳ではない。実は書けない。

しかし、フィルムが無くなるうとしてしている。自分がずっと一緒に歩いて来た8ミリの出荷が終わり、来年現像が終わる。それで8ミリが終わる訳ではないが終わりはそこにある。私は8ミリで創ることができなくなった時に創ることをやめる予感がしている。「もし無くなったら？そんなときに考えるよ。だって形あるものは無くなるんだもん。」そう言つて来たが、言うこととやることは違うという当たり前の流れになつていくようだ。

だったらここで書けるだけ書きたい方が私を…俺を育ててくれた8ミリに対する気持ちが表せるな、と思ひながらいた。上司の萩原朔美さんからは別の意味で書けと言われていた。それも含めて、瞬刊ハイロを三度びやろうと決めた時に書いてみようかなと盟友の神山昇君に話したら、間髪入れず「やろう！」と言われ、心が固まつた。よし！

1 映画を教えられるか

と言ひながら、私はずっと映画を教えてきたんですけど、よく「映画なんて教えられるのか？」と言う言葉を聞くんです。映画なんて教えられるものじゃない、そういうことなんです。で、そのたんびにその言葉を肝に銘じながらも、質問するんです。何なら教えられるんですか？あまり明確な答えは返つてこないんですが。

どうやら、例えば机を作つたりバイクを作つたりは教えられるけど、映画はちがう。だから教えられないと言うことだろうと、自分なりに理解してるんです。

確かに机やバイクはいろいろな形があるけれど、その構造は共通したものがある。ねじ一本無いだけで成立しないような構造がある。映画は：間違えて撮影してもうっかりつないでも映画として成立してしまうこともある。実にいい加減な構造ですよ。（実はこの、いい加減と言うのは私にとつて大事なキーワードなんです）あるようで無いような、無いようであるような構造を支えているのは作る人の感性だから。他人と同じに作るなんてできやしないと、そう言うことなんです。

「感性は教えられない」：その一言があまりにも説得力を持つために芸術や芸能などの技術を使うものの指導は、テクニックの伝授やその評価に傾いています。

だから「基本」・「基礎」というものがテクニックの伝授のための「基本」・「基礎」になつていくんです。それは形を教える、と言うことなんです。形は大切です。内容は形を通して現れるんですから。

だけど、ギリシャ彫刻の形だけを真似た（内容の抜けた）石膏像をデッサンしても内容は伝わらないですよ。多分日本の芸術教育・技術教育ついて、いや教育ついて、そのほとんどが石膏デッサンの、そんな形だけが伝わるやり方なんじゃないでしょうか。そういう教育を受けてくれば学校は辛くてつまらないものになるし、映画と言う感性命なんてロマンチックなものは教えられない！ってなるかも知れません。

形の無い技術はあり得ません。だから形は教えなければなりません。だけど形はその人が何らかの内容（意識ともいえます）を通して教えなければなりません。形っていうのは、そこに内容を含めて教えなければならぬんです。それを避けて教育が成り立つてしまうのは（感性は教えられない）にあるんじゃないでしょうか。

2 形の美しさ

（感性は教えられない）のではなく、一人一人が違うから（教えるのが難しい）が正解だろうと思ってるんです。しかも、難しいのは教えるという考え方が狭いからだ、言い換えれば狭い方が教えやすいし教わりやすいからだとも言えるでしょう。

石膏デッサンの形だけを手に入れたら、みんな同じものを手に入れることになる。安心の元です。そればかりでなく、みんな同じ（形）ばかりが目に入るようになるんです。安心して生活できます。安心は美しくありません。つまり美しくない（形）になるんです。形だけの美しさって言う言葉がありますけど、それは言葉だけです。形だけの美しさなんてあり得ません。形だけのものは美しくないんです。内容があつて、形の美しさは存在するんです。

美しさは（美しい）という概念とは別のところに存在します。美しいと感じる気持ちは一般的に浮かんてくる（美しい）という尺度を判断基準にしていないんです。だから富士山を美しいとあんまり思わない方が良いでしょう。あんまり思ってしまうと他の山の美しさが見えなくなってしまうんです。（思う）を（教える）に代えると、（映画を教えられるのか）が分かてきます。でも教えるっていうのは、感性を殺すことではないんですよ。感性はその持ち主が大事にしないと、殺されやすいとも言えるんですけどね。：誰に殺されるんですかね。

3 一人一人が違う

自分が何かを見たこと、聞いたことに敏感になったということは、そこに何らかの感性が働いたということです。それまでの自分が思ってもいなかったことを手に入れる、感性は人の生き様の大切な表れなんです。感性が勝手に自分の分身をピックアップしたということなんです。

それを意識して（認識して）いく、つまり（なんで美しいと思ったのだろう）と思ってみると、そう言う意識（認識）と形が出会って、その人の美しさが現れてくる、そう言うことの繰り返しでその人の美しさの基準ができてくる、つてことなんじゃないでしょうか。それは一人一人が違う道を探して作って歩く営みなわけで、だからこそとても尊い作業ですよ。

考えてみると、感性は戦つて勝ち取つていかなきゃいけないものになつてしまつてゐるんですね。本来は自分だけのもののはずなのに。

指導者がそういう意識を育てること、本当にできないんでしょうか。

4 失敗のくり返しを教える

一人二人が違う、ということは指導者が目の前の二人一人の違いをきちんと把握しなければならないから、面倒です。

細かいところに目を配らなければならない。それ以前のその人がどうだったのかを踏まえないといけない。この後どういう姿になつていくのか分からない。だから指導に勇気がいりますよね。指導する自分の感性がその人に理解できるか分からない。自分の感性を受け入れる感性と勇気が相手にあるかどうか分からない。だから強引さと信念が半端無く要求されますよね。面倒です。

これはこうするんだ、こういうシステムでやつていくものだ、などというヘルールを作つてそれに基づいて指導する方が優しいし、効率がいい・・・だけなんじゃないですかね。

映画ができて110年以上経ちますが、その間にいろいろな人のいろいろな試行錯誤があつて、今日ではかなり安定した形を見せています。そこに共通した作り方が見えるから、その共通項をヘルールとして教えれば、そんなに問題は起きないでしょう。個性はそのあとだ！つて言つておけば。教わる方も安心しますよね。あとだ！つて。手に入るのは誰でも作れるような形の作り方ですけど。

作りたい！覚えたい！つて思った時つて、最も純粹で最もパワフルなエネルギーが溢れている時なんです。そう言う時に、個性はそのあとだつて。失敗してはいけないんでしょうか？

自分の手に入れたコツを教えようとする人も多いです。そしてそれを教わろうとする人も多いです。コツつていうのはその人がいろいろな試みを繰り返して、言い換えればたくさんの失敗を繰り返して自分の体で手に入れたもので、その人だけに通用するものなん

だと思ふんです。稀にその人に似たような資質を備えた人に当てはまることはあります。または熟練してきた時期に教わると世界が広がる、ということもあります。でも、ほとんどの場合は〈形〉だけ手に入れることになると思ふんです。

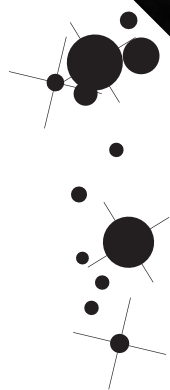
教えるということとは、まずやらせること、やったことを考えさせることです。指導者はやつて考えているその人を見ることです。その繰り返しです。

教える人にも教わる人にも難しいことですが、黙つて見ていること・・・じゃないでしょうか。

(考えていくべきは、〈自分の形を創る〉ということ。その土台としての体力と目と耳と五感を鍛えるということ。〈内容〉を育てる〈認識〉を意識すること。その認識(気持ち)を表に出すこと。それらを他人に向けて意識して実行すること。次回以降、それらを考察していきたい。)

Shunkan **HAILO**

チョコレートのように、甘い香りと骨の苦みでリニュール：



第2巻

1号

ほしのあきら責任編集

アートディレクション：神山昇

発行予定：2012年7月20日